ルソンに飢ゆ

福岡市中央区　　金丸　利孝

昭和１７年以来私は福岡の西部第４６部隊に勤務していたが、１９年７月フィリピン方面軍司令部付を命ぜられ、門司港を出た。途中バシー海峡において米潜水艦の魚雷攻撃により乗船吉野丸が沈没し、私は海上を漂流すること実に３６時間、辛うじてマニラの軍司令部へ辿りつくことができた。

軍司令部では参謀部二課（情報）勤務を命ぜられ、主として航空情報を担当したが、米軍の比島来攻後は日米の隔絶した戦力の差によって友軍は惨憺たる敗走を重ね、軍司令部もマニラからイポ、バギオ、キアンガンと次々に奥地へと後退、その度に軍司令官Ｙ大将に従って行を共にした。

その間、情報収集のため前線にも赴き、幾度となく死の関頭に立ったが、その都度奇跡的に危機を脱し九死に一生を得た。

しかし、１機の飛行機も１輌の戦車、１門の砲さえも無く、その上肝腎の食糧さえなくなった日本軍と、豊富な物資戦力を誇る米軍との戦いはその帰趨明らかで、Ｙ大将直轄の尚武集団も２０年７月頃には、狭いアシン渓谷に追い詰められ、全滅の日は目前に迫っていた。

そのような状況の中で、辛うじて生き残っていた軍隊も在留邦人も、包囲網の中で食うに食なく餓死者が続出していたが、更にマラリヤ、赤痢等が蔓延し猖獗（しょうけつ）を極めていた。医薬品も涸渇して無く、弱った体がひとたび病魔に冒されるとそれは死を意味した。比島戦没者の中で餓死者と病死者が非常に多かったことは、比島戦争の悲しい特色であった。

このような極限の中で、私は情報もはいらなくなった司令部から、前線部隊へ転属を命ぜられた。しかし、部隊到着と同時に病に倒れた。

○　病魔と飢餓

＊兵士らが土間に草敷き病み伏せる病兵小屋に吾も移さる

＊薬なく食なく土間に草敷きて眼（まなこ）うつろに兵ら病み伏す（勿論私もその一人であった）

＊かさかさと敷草の音かすかにて病兵闇に寝返り打つらし

＊十五分毎赤痢の腹はしぼりたり出るは僅かの血便なれど

＊訪ね来し軍医なれども包帯も薬も尽きて所持せずと言う

＊野草のほか食う物もなき病む吾に軍医は炭をすすめて去りぬ（「炭は腹薬になるから木を燃やして後の炭を食べるように」とだけ言って軍医は早々に立ち去った）

＊飢えて病むこの身にも血は残れるかほどばしる便のその赤き色

＊迸（ほとばし）る血便のたび吾が血失す何時まで保つ命ならむか（毎日水様の血便が幾度も

幾度も続いた）

＊病兵に自決のための手榴弾渡して隊は出で発ち行きぬ（食糧も薬もなく後に病兵だけが残された）

＊自決用とは言わねど黒き手榴弾病兵吾にも渡されにけり

＊死を待ちて病兵は土間に転がれり薬も武器も食さえもなく（正に遺棄された病兵達であった）

＊日は暮れて病兵小屋の暗闇に兵士の呻きつづきて止まず

＊今日もまた息絶えし兵あり体動く病兵がかけ来ぬ僅かな土を

＊病み細る足を引きずり野に出でて今日口にする野草摘み来ぬ（どの病兵も遠くまで食料を探しに行く体力はなかった）

＊地の中の白き虫さえ口にしぬ野草のほかに食う物もなき日々

＊他人目には吾も幽鬼とうつりなむ飢え続く身に血便止まず

＊つめて寝し病兵小屋も今はすでにまばらとなりぬ戦友（とも）らい逝きて

＊二十余名の病兵日毎死にゆきて今日命あるは吾と四名

＊いま生きる五名の中の次に逝く者は誰ならむあるいは吾か

＊吾が命いくばくならむ今日もまた残る病兵一人逝きたり

＊辿り来て自決の場所を定めたりアシンの渓を見はるかす岡

＊敵兵が迫りし時はこの岡に自爆し果てむと心定めぬ（そこは病兵小屋に近い、美しい芝生の岡であった）

＊絶え間なき砲声聞きつつ岡に座し最後のときを独り想いぬ

＊刻々とその日迫りぬ自決して果つる命か病死する身か（病死と自決、何れの日が先に訪れるかは分からなかったが、刻々とその日は迫っていた）

○　終戦と死の不安

晴天の霹靂のような８月１５日、戦は終った。

＊一度（ひとたび）は自決ときめし命なれど日々にいとおし戦（いくさ）終われば（死をはっきり覚悟していたが、その反動のように終戦で生への執着心が強く心の中に湧いて来た）

＊自決場所と一度は決めし岡に座し弱りゆく身を独り憂いぬ（餓死病死の不安は終戦後も続いた）

＊今ここに命つきなば吾もまた朽ち果つる身か知る人もなく

＊母は嘆かむいま吾死なばいつどこに果てしとも知らず遺骨も還らず

＊家を恋い大和を恋いて白鳥となりて還りし日本武尊よ（東征を終え故郷を目前にしながら病死したという尊の故事が思い出された）

＊吾もまた命つきなば白鳥となりて還らむ遠き祖国に

＊翼あらば急ぎ還らむ故里へ死期迫る身の命ある間に

○　奇跡の生還（２０年１２月）

＊いざ去なむ苔むす戦友（とも）よいざいなむせめてみ霊よ共に還らむ（マニラ港帰還船上にて）

＊祖国見ぬ命のありて祖国見ぬ日向の山に冬陽さしおり（日向灘にて船上より）

＊やわらかき冬陽をうけて日向路の山連なれり国は破るも

＊幾そたび死線越え来しこの命保ち還りぬ国は破るも

＊戦いに敗れし死兵らは出迎えの一人だになき祖国の土踏む（帰りついた大竹港には一人の出迎えもなく、岸壁には木枯だけが吹き抜けていた）

○　追悼と祈り

＊戦場に朽ちてゆく骸（しかばね）いたましき“散華”と言えば美しかれども

＊戦死餓死病死の将士５０萬散りしみ霊よ比島の野山に（比島の戦没者は４９万８６００名の多きに達した）

＊兵（つわもの）は多く戦野に散りゆけど無念の心語る者なし

＊何時何処に死せしとも知れず屍の水清き草むす野山よ海よ

＊南十字星煌く比島の野を山をさまよう戦友の還らぬみ霊よ

○　おわりに

美しく燦く南十字星の下、一途に祖国と民族を護るためと信じて尊い一命を投げ打ち斃（たお）れていった多くの将士達は、薄暗い密林の葉陰に、また冷たい海の底深く、あるいは南溟の雲の彼方に、その遺骨さえ拾ってもらうこともなく、最愛の妻子や肉親に無念の想いを訴えることもできず、空しく苔むして今も慟哭していることであろう。その胸中を偲べば、心からその死を悼まずにはいられない。

また在留邦人婦女子の目を覆いたくなるような惨状も忘れることができない。特にあの山中で激しく嗚咽しながら幼いわが子を埋葬していた婦人や、飢えと病で動くこともできず、幼児と共に二人道傍に座り母子で声を上げて泣き続けていた親子の姿、あるいは病の母と二人でとぼとぼと山径を歩いていた幼児の澄んだ瞳等、半世紀を経た今日でも瞼に焼きついていて消えることがない。体力も抵抗力もない幼子故に、その後も続いたあの苦境の中では飢えと病のためその殆どが生き残ることはできなかったものと思われる。戦争の意味も分からず、あの未開の地で短い命を終え母の手で葬られた幼児達は、再び母に詣でてもらうこともできず、やがてその小さな体は朽ち果て、比島の土となっていったことであろう。

第２次大戦が終わって５０年、国の利害、政治、宗教、人種等の対立から戦火が絶ゆることがない。地球上に硝煙が消え、真の平和が訪れるのは果していつのことであろうか。

死線を越え来て以来半世紀、比島戦を顧みて深く戦争の悲惨な罪禍、空しさを思うと共に、戦火に斃（たお）れていった人々の御冥福を祈り、心から平和を願う次第である。